目　次

アルテミオ・クルスの死 ……7

*

解説（木村榮一）……493

あらかじめ死を考えておくことは自由を考えることである。

モンテーニュ『エッセイ』

氷の揺り籠から地上に出て
墓石を通って地下に戻ってゆく人間たちよ
自分がどのような姿をしているか
とくと見るがよい……

カルデロン『世界大劇場』

このおれときては、自分にできたでもあろうことは、この自分が知っているだけで……他人にとってはせいぜい、「あるいは……かもしれぬ」といったくらいの値打ちしかない男なのだ。

スタンダール『赤と黒』

……ぼくと神、とぼくたちの三者
つねにこの三者！……

ゴロスティサ『無限の死』

人生なんて安っぽくて下らない、なんの値打ちもないものさ。

メキシコ民謡

アルテミオ・クルスの死

ラテンアメリカの闘争における同志であり、
北アメリカの真実の声である、
C・ライト・ミルズに捧げる

目が覚めた……。ペニスにその冷たいものが触れて目が覚めた。今はじめて知ったのだが、人間というやつは自分の意思と関わりなく小便をすることがあるらしい。わしは目を閉じている。耳もとで話し声がするが、よく聞きとれん。目を開けば、聞きとれるだろうか？……。それにしても瞼が重い、まるで鉛のようだ。口の中は銅貨の味がし、ハンマーで叩いてでもいるような耳鳴りがする……それに息をすると錆びた銀のような味が……。すべて金属だ。すると、ふたたび鉱物に戻って行くのだろうか？　いつの間にか小便をしていた。たぶん、その数時間の間に気づかないうちに食事をしたのだ――意識を失っていたことを思い出してショックを受けた。明るくなりはじめた時に、わしは手を伸ばした――そのつもりはなかったが――受話機がガチャンと床に落ち、そのままベッドにうつぶせに倒れて腕をだらりと下げた。あの時は手首の血管を蟻が這いまわっているように感じた。今は意識が戻っているが、目を開けようという気持ちにはなれん。目を閉じているのに、顔のそばで光のようなものがチカチカしてうるさくて仕方がない。閉じた目の奥では、黒い光と青い輪がフーガのように追っかけっこしておる。何とか右目を開けると、女物のバッ

グに縫いつけてある装飾のガラスに自分の顔が映っている。これがわしだ。これがわしなのだ。不揃いな四角形のガラスに顔の一部が映っている老人、これがわしだ。この目がわしだ。この目がわしなのだ。積年の憤怒、遠い昔に忘れたはずなのに、つねに蘇ってくる怒りが根を張り、皺となって囲んでいる目、これがわしだ。瞼の間で腫れ上がっている緑色の目がわしだ。瞼。瞼。油のような瞼。この鼻がわしだ。この鼻。この鼻。潰れた鼻。小鼻の張った。この頬骨がわしだ。頬骨。そこに白い髯が生えている。生えている。歪んだ顔。歪んだ顔。歪んだ顔。年齢や苦痛に関わりなく歪んでいる顔、これがわしだ。歪んだ顔。犬歯はタバコの脂で黒ずんでいる。タバコ。タバコ。わしの吐く息でガラスがくもる。と、手が伸びてナイトテーブルの上からハンドバッグを取り上げる。

「医師、見てください、何かしようとして……」

「クルスさん……」

「死ぬ間際になっても、まだこの人は私たちを騙そうとしているんです」

言い返す気にもなれん。口の中は古い貨幣がいっぱい詰まったようないやな味がする。薄目を開けると、まつげの間から二人の女と消毒薬の匂いのする医師の姿が見える。医者はわしの下着の下に手を入れて胸を触診しているが、その汗ばんだ手から気化したアルコールの匂いが立ちのぼってくる。わしは手を払いのけようとする。

「さあ、さあ、おとなしくして、クルスさん……」

わしは口をきかんぞ。いや、あれは口ではない、ガラスに映っているのは唇などでなく一本の皺だ。腕はシーツの上に伸ばしておこう。毛布は腹のあたりまでかかっている。胃が……ううっ……。股のところに冷たい器具がはさんであるので、脚を閉じることもできん。胸のあたりはまだ感覚がもどっていないが、蟻が這いまわっているような感じがする……以前、長時間映画館に坐っていた時にも同じようなことがあった。そうだ、きっと血行が悪いのだ。それだけだ。それだけのことだ。心配しなくていい。少しは身体のことも考えてやらなくてはいかんのだが、面倒くさくて……。自分の身体、ひとつに結びついた身体。身体のことを考えるとくたびれる。考えないことだ。身体はここにあり、わしはその証人として身体のことを考えているわけだ。この身体、これがわしだ。肉体は残る。いや、消えてゆく……消えてゆく……やがて分解して、神経繊維やかさかさに乾いた皮膚、細胞や血球となって溶解してゆくのだ。わしの肉体、それを医者が指で触診している。不安になる、身体のことを考えるとやはり不安になる。顔は？　わしの顔が映っていたハンドバッグはテレーサがテーブルから取り上げたので、それを思い出そうとしてみる。不揃いなガラスに映っていた自分の顔の一部を。一方の目は耳のすぐそばにあって、もう一方の目はひどくかけ離れたところにある。回転する三枚のガラスに映った歪んだ顔の一部。額に汗が流れる。もう一度目を閉じる。頼む、頼むから、わしの顔とわしの身体を返してくれ！　頼む！　またしてもあの手がわしの身体を撫でまわす。払いのけようとするが、

力が入らん。

「気分はよくなって？」

わしは彼女のほうを見ない。わしはカタリーナのほうを見ない。遠くに視線をやると、肘掛け椅子に坐っているテレーサが見える。新聞を広げている。あれはわしの新聞だ。新聞の陰になって顔は見えないが、テレーサに間違いない。

「窓を開けてくれ」

「いいえ、いけません、風邪でもひいたらどうするんです」

「ママ、放っておけば。どうせ仮病なんだから」

おや、香の匂いがするぞ。ドアのところから話し声が聞こえてくる。そうか、あの黒いカソックを着けた男が、聖水を額にいただき、香の匂いをぷんぷんさせてやってきたんだな。厳しい説教をしてわしをあの世へ送りこもうという寸法か。どいつもこいつもワナにかかりおったわい。

「パディーリャはまだか？」

「部屋の外で待っています」

「通してくれ」

「でも……」

「先にパディーリャを通すんだ」

ああ、パディーリャか、こちらへ来てくれ。テープレコーダーは持ってきただろうな。万事ぬかりないお前のことだ、まさか忘れたりはせんだろう。毎晩それを下げてコヨアカンの屋敷へやってくることになっておるんだからな。今日みたいな日こそ、いつもと何ひとつ変わってはいないという確かな手ごたえを得たいのだ。手順どおりに儀式を執り行わなくてはいかんのだ、パディーリャ。そう、わしのそばに来てくれ。女どもはさぞかしいやがっておるだろうがな。

「そばに行って、顔をよく見てもらいなさい。ちゃんと名前を言うのよ」

「私……私、グローリアです……」

彼女の顔がもっとはっきり見えるといいんだがな、ひきつったようなその顔を……。ぼろぼろになってはがれ落ちる皮膚はいやな臭いがするが、彼女はたぶんその臭いを嗅いだだろう。落ちくぼんだ胸、ごま塩の無精髭、鼻汁の出ている鼻を彼女は見たにちがいない。こうしたものは……。

彼女が向こうへ連れてゆかれる。

医師が脈をとる。

「ほかの医師とも相談する必要があるでしょうね」

カタリーナがわしの手を撫でているが、むだなことだ。彼女の目を見つめようとするが、よく見えん。彼女を引きとめ、氷のように冷たいその手を握る。

「あの朝、わしはわくわくしながらあれが来るのを待っていた。二人して馬で川を渡ったんだ」

「えっ、なんておっしゃったの？　口をきくと疲れますよ」

「向こうに帰りたいんだよ、カタリーナ。今さらどうにもならないがね」

司祭がそばにひざまずいて、何やらぶつぶつつぶやいている。パディーリャがテープレコーダーのコンセントを差し込んだな。わしの声、わしの言葉が聞こえる。おや、大声でわめいているな。そうか、わしは生き延びたのか。医者が二人、ドアのところから中をのぞき込んでいる。わしは生き延びたのだ。レヒーナ、傷口が痛む、痛むんだ、ようやくそのことに気づいたんだ。兵隊、レヒーナ。ひどくやられた、抱いてくれ。刃渡りの長い氷のような剣で胃のあたりをグサリとやられたんだ。誰か別の男に腹をやられた。おや、香の匂いだ。ああ、もうくたびれた。どうとでも好きにするがいい。わしが呻(うめ)いているというのに、連中は重そうにわしの身体を起こしている。勝手にしろ。わしが命を取りとめたのはあんたたちのおかげじゃない。だめだ、もう我慢できん。これはわしが選び取ったことじゃない。痛みで身体が二つ折れになる。氷のように冷たい自分の足に触ってみる。爪が青く変色しているが、見ているだけでぞっとする。ああ、わしは生き延びたのだ。昨日は何をしたのかな？　いま現在自分の身に起こっていることを忘れるには、昨日したことを考えるのがいちばんだ。それだとはっきりしておる、はっきりとな。昨日のことを考え

るんだ。まだそれほどぼけてはおらん。そんなに心配することはない。まだ昨日のことを考えるだけの力が残っておるんだからな。昨日昨日昨日。アルテミオ・クルスは昨日、エルモシーリョから飛行機でメキシコ市に飛んだ。昨日アルテミオ・クルスは……。病気で倒れる前の昨日、アルテミオ・クルスは……。いや、病気になんぞかかってはおらん。昨日、アルテミオ・クルスは執務室にいたが、その時急に身体の具合が悪くなった。いや、あれは昨日ではない、今朝だ。アルテミオ・クルス。彼は病気になんぞかかってはおらん。ちがう、アルテミオ・クルスではない。別の人間だ。ベッドの前の鏡に映っているもうひとりの男だ。別のアルテミオ・クルス。彼の双児の兄弟だ。アルテミオ・クルスは病気にかかっている。もうひとりのアルテミオ・クルスが。その男が病気なのだ。生きてはおらん。いや、まだ生きておる。アルテミオ・クルスは生きた。何年かを生きた……。その年月を懐かしく思い出しはしなかった。長い年月ではない。ほんの数日生きただけだ。双児の兄弟。アルテミオ・クルス。自らの分身。死の直前の数日間を生きたアルテミオ・クルスは昨日、昨日、アルテミオ・クルスは……わしは……もうひとりのわしは……昨日……。

お前は昨日、いつもと同じことをした。しかし、そんなことを思い出したところで何の役にも立たないことがわかっていないのだ。できることなら寝室の薄闇の中に横たわって、

すでに起こったことを記憶として思い出したいと思っている。というのも、すでに起こったことを予見したくないからだ。薄闇の中で、過去を振り返って見ることのできないお前の目は未来を見つめる。そうだ、昨日、つまり一九五九年四月九日、午前九時五十五分発のメヒカーナ航空の定期便に乗って、お前は地獄のように暑いソノーラ州の首都エルモシーリョを発つだろう。そして、十六時三十分ちょうどにメキシコ市に着くだろう。四発機の飛行機のシートに腰をおろして、お前は日干しレンガとトタン屋根がベルト状に延びている灰色の平べったい町を眺めるだろう。キャビンアテンダントがセロファンに包んだチューインガムを差し出すだろう――そのことをはっきり覚えているのは、キャビンアテンダントがすばらしい美人だからだろう(ここはだろうではなく、だからにちがいないとすべきだ。これからは未来形でものを考えないことにしよう)。年のせいで、実際に女性を相手にするよりもむしろ空想を楽しむようになってはいるが(この言い方はまずい。お前は空想を楽しむことしかできないにしても、自分ではけっしてそのことを認めないだろう)、女性を見る目だけは相変わらず確かだろう。〈禁煙(ノースモーキング)。シートベルト(ファスン・シート・ベルト)をお締めください〉という掲示がついたとたんに、メキシコ盆地の上にさしかかった飛行機は、その薄い大気の中で機体を支えきれなくなったように突然ガクンと高度を落とし、続いて右に大きく傾くだろう。上から、包みや袋、バッグがばらばら落ちてきて、乗客は悲鳴を上げ、中には小さな声ですすり泣いている者もいるだろう。右翼の第四エンジンが火を噴いて停止する

アルテミオ・クルスの死（し）　フエンテス作

2019年11月15日　第1刷発行

訳　者　木村榮一（きむらえいいち）

発行者　岡本　厚

発行所　株式会社　岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
文庫編集部 03-5210-4051
https://www.iwanami.co.jp/

印刷・理想社　カバー・精興社　製本・中永製本

ISBN 978-4-00-327942-7　　Printed in Japan